

サラは夫アブラハムとともに、「行く先を知らないで」旅をした女性です。聖書は、



Abram's Counsel to Sarai (1896–1902) by James Tissot

…たとえばサラは、アブラハムを主人と呼んで、彼に服従しました。あなたがたも、善を行い、また何事も恐れぬなら、サラの娘となるのです。(一ペト 3:6) また、

…信仰によって、不妊の女サラ自身も、年齢が盛りを過ぎていたのに子をもうける力を得ました。約束をなされた方は真実な方であると、信じていたからです。(ヘブル 11:11)…と、サラを、夫に忠実に従った、勇気ある、信仰深い女性として褒め称えています。

彼らはハラン（交易の中心都市・トルコ）に住んでいました。ところがアブラハムは「ここを出て、私が示す地に行きなさい。あなたを大いなる国民にし、祝福を与える」という神の言葉を聞きました。

一族を連れてハランを出発した時、アブラハムが75歳、サラが65歳であったと聖書に記されています。聖書の数字はとても大きくて、伝説的、巨人的像を示したいのかもしれませんが。カナン地方に辿りついてからも、アブラハムたちはあちらこちらと移動を重ねています。その間、親族が分裂したり、地域の王権をめぐる戦争があったり、多民族との摩擦を避けるための気配りが必要だったり、アブラハムは必死で神に祈りながら、生き延びる道を模索しています。

ある時、飢饉でエジプトに逃れたとき、アブラハムは美貌の妻サラを、ファラオの宮廷に差し出し、身の安全を図るのです。このようなことはその後にもあったと記されています。美しい女性は上等の品物だったのでしょう。非常に屈辱的な事件です。サラは苦しんだことでしょう。

とうとうサラは高齢になり、76歳の時、自分の女奴隷ハガルをアブラハムの側女として与え、イシュマエルを得ます。このこともサラにとっては惨めな体験と言えるでしょう。けれどもやっと、アブラハム100歳、サラ90歳の時、一人息子イサクが与えられました。不妊で苦しみ、ようやくイサクを与えられたサラにとって、一人息子は何ものにもまさる大きな喜び、希望となりました。

それなのに、アブラハムがイサクを捧げるために連れて行ってしまいます。少年イサクは何も知らずに父に従い、薪の上で縛られ、生贄として捧げられようとしています。イサクがいなくなった時、サラは何を思ったでしょう。聖書はサラもイサクもどんな気持ちで父のこの行為を受け止めたのか何も記していません。不思議なことに英語の聖書では、この事件の後、アブラハムだけが、待たせていた従者の元に帰り、ベエル・シェバ（都市部）に住むのです。その後すぐサラが127歳でヘブロン（エルサレムの南・逃れの町）で死にます。アブラハムが一人でサラを埋葬します。

20歳頃になって再び登場したイサクはネゲブ地方（砂漠）に住んでいました。近距離とはいえ、家族バラバラになって住んでいたようです。サラはアブラハムを許せなかったのでしょうか。そしてイサクは結婚すると、母の住んでいた天幕に妻リベカを案内したとあります。そして、イサクも母サラと同じヘブロン（エルサレムの南・逃れの町）で死去しています。イサクは母サラを深く愛していたようです。両親の愛情をいっぱいを受けて育ったイサクは、長い時間をかけて、神が生贄の雄羊を用意してくれたことを心に刻み、父の「あの信仰の行為」を受け止めたようです。それゆえ、息子のヤコブが、「父イサクの畏れ敬う方が私の味方でなかったら～」と、信仰がアブラハムからイサクに継承され、ヤコブ自身もその信仰によって生きていることを証しているのです。